

吉野六組門信徒講座

(注)
教区、組について

本願寺に行って「光遍寺の～です。」と言っても分かってもらえません。「奈良教区吉野南組(ならきょうく よしのみなみそ) 光遍寺の～です。」とおっしゃってください。

教区は各都道府県に一致し、それはさらに組(そ)に区分されています(奈良教区には 19 の組があります)。組は浄土真宗本願寺派の寺院をまとめる最小単位です。構成寺院数は、おおむね 10 から 20 ケ寺ですが、なかには、50 ケ寺あるいはそれ以上の大規模の組もあります。国の市町村の行政区画とは領域的にずれており、むしろ律令制度の国・郡の領域(江戸時代のそれ)に一致しています。吉野地方は東西南北に、中、宗川を加えて六つの組に分けられます。東組は吉野町中心、北組は下市町・大淀町・五條市中心、中組は黒滝村中心、西組は旧西吉野村中心、宗川組は西旧吉野村宗川周辺、南組は天川村・旧大塔村の寺院から構成されています。

～ 天川村山村開発センターに 300 人超が集う ～

「教区、組について」(参照)があり、毎年八月後半の日曜日に持ち回りで門信徒講座が開催されています。今年も吉野南組が当番組であり、特に光遍寺檀家内での開催とあって、光遍寺役員の方々には早朝より駐車場や受付等でご尽力いただき、ありがとうございました。おかげさまで円滑に講座を開催することができました。

歌に酔いしれ、法話に涙

八月十九日(日)、天川山村開発センターにおいて、吉野六組門信徒講座が開催されました。吉野には六つの組(左注「教区、組について」参照)があり、毎年八月後半の日曜日に持ち回りで門信徒講座が開催されています。今年も吉野南組が当番組であり、特に光遍寺檀家内での開催とあって、光遍寺役員の方々には早朝より駐車場や受付等でご尽力いただき、ありがとうございました。おかげさまで円滑に講座を開催することができました。



やなせな さん

第一部やなせなさんの歌声は透き通るようで、『癒し』の空間を創り出してくださいました。また、仏教的素養から生まれた歌詞も素晴らしいものでした。第二部の長倉伯博士の法話では、末期的患者と関わった事例を挙げられ、そこから『いのち』について考えさせられました。「死にたい、殺してください」という叫びから始まり、最後には「ありがとう」といのかを終えていかれた方々から学ぶことは非常に多いです。会場のあちこちで涙を拭う姿が見られました。実は、財政的に苦しいため、今回で最後の講座になる予定でしたが、あまりの盛況ぶりに急遽来年も続行される運びとなりました。次回当番組は東組です。また詳細が決定しましたらお知らせします。



長倉伯博士

今回の布教使は本願寺派布教使正福寺住職 冬野正隆師です。御所市古瀬からいらしてくださいます。この先生は光遍寺とは初めての御縁で、どのようなか、どんなご法話を聞かせていただけるのか楽しみにしています。また、九日午後七時より光遍寺裏山後醍醐天皇陵にて天皇会(「天皇会とは」参照)が勤まります。さらに、法要終了後、天川村最後の盆踊りとごくまきもありません。皆さん、お誘い合わせの上お参り下さい。

光遍寺新聞




第 4 号

発行所
〒638-0315
奈良県吉野郡
天川村沢原 141
浄土真宗
本願寺派
仏照山
光遍寺

電話番号
0747-63-0638
ホームページ
<http://www.kouhenji.org>

今月の法語

生きていく
という事は決して
私の力ではないのだ
(高松信英)



秋の永代経法要 並びに天皇会

九月八日(土)、九日(日)

天皇会とは?

南北朝時代、後醍醐天皇は吉野皇居から難を逃れ、天川にいられた際、当寺を御所とされ、勅願所と定めて、仏照山光遍寺と号したと伝えられています。さらには、光遍寺五代目住職賢光は後醍醐天皇の子であると言われ、光遍寺は後醍醐天皇と非常に深いご縁があります。したがって、毎年、仏教壮年会の皆様が中心となり、後醍醐天皇のご遺徳を偲び、益々の御法儀繁盛をお誓いし、後醍醐天皇陵でお勤めをしています。



後醍醐天皇

門信徒 広場

もっともなじみ深いお経といえる『仏説阿弥陀経』。このお経ならスラスラあげられますという方も多いのではないのでしょうか？

仏説阿弥陀経は「無問自説の経」と言われています。通常お経は、お弟子の問いに答えるという形で構成されていますが、阿弥陀経では問いもないのに、お釈迦様が自ら語られます。それほどお釈迦様が、お弟子に(私達に)伝えたかったことなのです。

その内容は、まず阿弥陀如来の浄土の荘厳と阿弥陀如来の徳が説かれ、ついで、この浄土に生まれるために念仏を称えることがすすめられ、最後に六方(東南西北下上)におられる諸仏が阿弥陀如来の徳を称讃し、そのみ教えを信ずる者を護ってくださることが説き明かされています。その際お釈迦様は、智恵第一と言われた弟子、舍利弗(しゃりほつ)に「舍利弗よ・・・、舍利弗よ・・・」と何度も呼びかけられます。まるでそれは、私達一人一人に呼びかけてくださっているようで、心に響きます。

さて、ここで好評のクイズ第三弾。

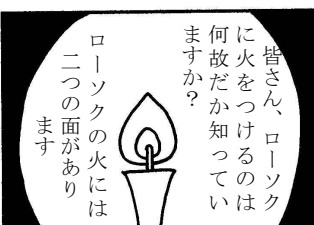
問 『仏説阿弥陀経』の中で、お釈迦様は何回「舍利弗よ・・・」と呼びかけられているのでしょうか？

彼岸会にお参りいただき、帳場にて正解回数を告げていただきましたら、先着五名様は素敵な記念品を差し上げます。挑戦してみてください。

(ヒント)

阿弥陀経の中で、「舍利弗」と書かれている部分を数え上げます。でも、そのなかには、呼びかけでないものも含まれていますので、その数を引いた数字が答えとなります。現代語訳と比較しながら見ていくと分かりやすいかもしれません。

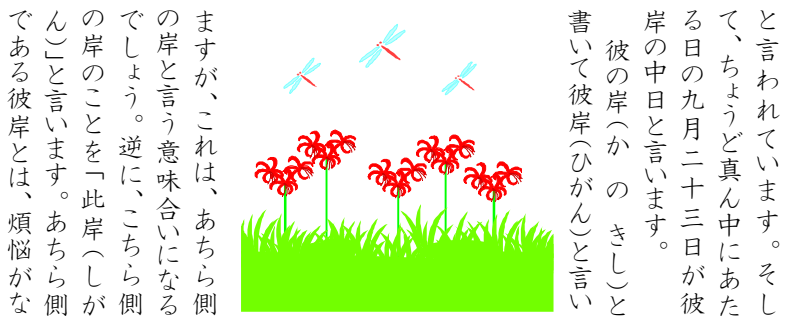
阿弥ちゃん!!



- 光遍寺新聞第3号 門信徒広場答え
- ① 清浄 (しょうじょう)
 - ② 貪欲 (とんよく)
 - ③ 歓喜 (かんぎ)
 - ④ 自然 (じねん)
 - ⑤ 男子 (なんし)
 - ⑥ 日月 (にちがつ)
 - ⑦ 赤色 (しゃくしき)
 - ⑧ 生死 (しょうじ)
 - ⑨ 信楽 (しんぎょう)
 - ⑩ 安養 (あんじょう)
- 皆さん、正解されていましたか？

彼岸 9月20日(木)~26日(水) 仏教強化週間

「暑さ寒さも彼岸まで」と申しますが、いつの間にか夏の暑さも和らぎ、またお彼岸の季節がやってきました。九月二十日(木)から二十六日(水)までの一週間、毎日午後七時三十分より彼岸会が勤まっています。



彼岸会では、極楽浄土を思いながら、先に往生された方々を偲び、自身もまた仏教に出会わせていただく大切な機会をとじていただけたらと思います。お誘い合わせの上、お参り下さい。

突然ですが、私たちは本当に生きていると言えるのでしょうか。そのことで思い起こされてくる言葉がありますので紹介させていただきます。

サカナは、海中にいても店頭におかれてもサカナである。人間は死ねば「故人」あるいは「遺体」である。生きているから人間である。しんじつ生きていないなら、しんじつ人間ではあり得ない。 <むのたけじ『詞集たいまつI』(評論社)>

「真実生きる」ということの厳しい問いかけだろうと思います。この言葉に出会ったとき、ただ生きているのは人間ではない、真実生きていなければ人間の顔をして生きていることにはならない、ということを知られました。では、「真実生きる」ということはどういうことなのでしょう。それは自分が自分らしく生きていける、素直になれる場に立つことでしょうか。人は誰も、そういう場を求めているはず。それが存在の故郷、浄土なのです。浄土とは、人と比較して人を恨んだり、人を羨んだり、自分を蔑む必要のない場。それこそ自分を見捨てず、自分をおとしめず、自分が自分となって生きられる場です。親鸞聖人は、すべての人びととともに浄土に生きる人になるということ、 “信心をたまわる” というのだと教えていただきました。